

女性で、病理学的、X線学的に Osteoblastic type の Osteosarcoma に、左側 RND、及び左下顎頭頸部から2部の下顎骨連続離断による腫瘍切除術施行、2週間後より ADM 60mg, CDDP 80mg 更に4週間間隔で2回 ADM 60mg を投与し、再発転移の傾向なく良好な経過をたどっている。血清 Al-P は術前高値を示したが、切除後数日で急速に正常に帰した。

13. 最近経験した口腔領域の悪性リンパ腫の1例

花沢康雄, 日暮寛之, 大木保秀
小林 操 (千大)
伊丹 純 (同・放射)
堀江 弘, 三方淳男
(同・病理 I)

悪性リンパ腫3症例を経験した。症例1: 39歳, 男性。初発部位: 右顎下部リンパ節。病理診断: Hodgkin's disease Lymphocytic predominance。臨床病期 stage 1のため放射線療法施行。治療後3か月再発なし。症例2; 3はそれぞれ75歳; 55歳女性; 男性。初発部位: 舌; 頸部リンパ節。病理診断: non-Hodgkin's Lymphoma mixed cell; small lymphocytic type。臨床病期: 1; IV。以上より、前者は照射、後者は化学療法で治療された。

14. 過去4年間の新潟大学歯学部での細胞診症例をまとめて

川崎建治 (福島医大・歯口外)

過去4年間に新潟大学歯学部口腔外科で、行なった細胞診の実施状況とその判定の問題点について述べた。検索した症例は、のべ230件、167症例で、その内訳は、良性病変が112例、悪性病変が57例で、扁平上皮癌が35例と最も多かった。

15. 口腔癌に対する扁平上皮癌関連抗原 (S.C.C.) 値の診断の有用性

吉田英彦, 武藤寿孝, 今井 裕
甲原玄秋 (千大)

扁平上皮癌関連抗原 (scc 値) を121検体について調べた。cut off 値2.0ng/mlでは悪性腫瘍の36%が陽性であった。stage の進行、組織分化度の上昇に伴ない SCC 値は上昇し、治療により値は低下した。SCC値1.5~2.0の間には癌症例が多くみられ、cut off を1.5とすると、それ以下の値を示す悪性腫瘍症例は10%以下に減少し

た。悪性腫瘍治療後の経過観察時に SCC 値が1.5以上の値を示す場合再発、転移を疑い充分な観察が必要と思われた。

16. 歯根未完成歯の即時移動術に関する研究

—幼犬における検討—

大井 浩, 金子 治, 青野 新
京田直人, 岩成進吉, 石井俊彦
堀 稔, 松江高光, 工藤逸郎
(日大・歯・口外 I)

演者らは雑種幼犬を用いて歯根未完成歯の即時移動術に関する実験を行い、病理組織学的に検索し、また術前の歯根完成度と術後の歯根伸長度について検討したので報告した。

即時移動術を応用する時期としては、外科的侵襲の影響、病理組織学的所見ならびに即時移動術後の最終的な歯根長を考慮すれば、術前に6割以上の歯根形成がみられる時期が適切と考えられた。

17. 吸収性ハイドロキシアパタイトの家兎脛骨値の経時的変化

高原利幸, 宮吉正人, 岡本恒一郎
佐藤研一 (千大)

今回我々は、Macroporous, Microporous 2種の吸収性ハイドロキシアパタイトを家兎の脛骨に移植し経時的な骨組織反応ならびに親和性を検索した。術後10日~1年経過後のX線写真及び脱灰パラフィン切片にて観察したところ、Macroporous では漸次吸収され骨と置換がみられたが Microporous では吸収は認められなかった。両者とも生体親和性の良い材料で吸収性の差を考慮すれば臨床的に有用と考えられた。

18. アパタイト Two-piece インプラントの臨床応用

岡崎有志, 麻生智義*, 宮田雅代*
村瀬博文*, 富田喜内*, 谷内健司
山下徹郎, 金沢正昭
(東日本学園大・歯・口外1, 口外2*)

最近、歯牙欠損部の機能回復を目的として非生体材料を用いたインプラントが盛んに行なわれている。中でも旭光学社製のアパタイト2ピースインプラント「アパセラム」は、合成アパタイトを焼結体としたもので、組織親和性が高く、骨性癒着をおこすことが明らかにされている。今回私達は昭和61年7月より、このアパセラムを